



2015年3月25日放送

頻用処方解説 小建中湯①

山口大学医学部附属病院 漢方診療部

(2016年より 広島大学 薬学部 漢方診療学 教授) **飯塚 徳男**

主な効能

まず小建中湯の主な効能についてお話しします。体質虚弱で疲労しやすく、血色がすぐれず、腹痛、動悸、手足のほてり、冷え、頻尿および多尿などのいずれかを伴う小児虚弱体質、疲労倦怠、神経質、慢性胃腸炎、小児夜尿症、夜なき等に効果を発揮します。

漢方的解釈

「体質虚弱で疲労しやすく」というのは、漢方では虚勞といいます。虚は虚実の虚で、勞は労働の勞です。虚勞とは虚損勞証の略であり、心身が虚し、内臓諸器官がつかれて、すなわち五臓すべての働きが衰退していることをいいます。生まれつき胃腸虚弱のためエネルギー不足が生じている場合とがんや不摂生などにより虚勞に陥る場合の2つのパターンがあります。

小建中湯はこの虚勞が引き起こす様々な症状や病態を改善しますので、本剤の適応のある患者、すなわち小建中湯の証は小児の虚勞と成人の虚勞の大きく2つに分けて考えると良いと思います。また、虚勞では消化吸収能力の低下による栄養不良、その結果生じる血虚や精神症状、動悸や冷えなどを訴えます。効能の中で記載されています「血色がすぐれず」とは、気血が不足した病態を意味します。これらを改善する小建中湯は体の内部から、これは、裏と書いて“り”と読みますが、裏を温めて陽気、つまりエネルギーを充填する温裏補陽剤というグループに属します。

処方名の由来

小建中湯は桂枝・芍薬・生姜・甘草・大棗・膠飴の6味からなります。最初の5つの生薬は桂枝湯であり、この中の芍薬を倍増させますと桂枝加芍薬湯となります。これに膠飴、すなわち水飴を加えたのが小建中湯です。したがって、本来ならば桂枝加芍薬膠飴湯と呼ばれても良いのですが、小建中湯と呼ばれるには当然いわれがあるようです。

まず建中湯という名前の由来ですが、浅田宗伯（1815-1894）の『勿誤藥室方函口訣』という書物では、「すべて古方書に中と云うは脾胃のことにて、建中は脾胃を建立するの義なり。」とあります。ここで使われている脾胃とは消化吸収に関わる上部消化管とイメージしてください。剣状突起とお臍をボーダーにして人間を上・中・下の3つのパーツに分けた時の真ん中にあたる中焦、ここは食べ物の消化吸収に重要な役割を演じる脾胃のある部位であり、中焦つまり脾胃の機能を立て直す薬として建中湯と命名されました。

あとは大と小ですが、これには諸説ありまして、大小という文字を漢方薬の頭文字として使うのは、どうも張仲景（150?-219）の『傷寒論』などの医書が最初らしいです。勿論、それら大小のつく漢方薬は、構成薬や適応証にも共通性があります。例えば、大柴胡湯と小柴胡湯の例にありますように相対的に大は実証、小は虚証に用いられ、さらに大より小のつく漢方薬の方が汎用される傾向にあり、その意味でも、小のつく漢方薬は代表的な方剤という意味合いもあるようです。書物によりますと、古くは、単に、建中湯といえは総じて小建中湯を指したということです。

構成生薬の漢方的な意義と薬理作用

漢方薬は複数の生薬から構成される多成分系薬剤ですので、太古より用いられてきた君・臣・佐・使という配合のルールがあります。『神農本草経』（後漢～三国時代成立）という古代の薬の教科書にその記載がありまして、君薬とは漢方薬の作用の中心的役割を演じる生薬を意味します。臣薬は君薬に次いで重要な作用を果たす生薬です。佐薬は君薬を助ける役割を演じます。使薬は君薬、臣薬、佐薬を補助する生薬です。

小建中湯の君薬は膠飴で、これは米や小麦などの粉に麦芽を混ぜて糖化させ、それを煮詰めて水あめ状にしたものです。大建中湯にも配合されている生薬でもあり、甘温、すなわち甘くて温める効果があります。温ためて、気を補い、とくに脾胃気虚を改善する作用があります。また、鎮痛および痙攣を取る作用があり、さらには肺を潤おし、乾いた咳や呼吸困難などを改善するとされますが、薬理作用に関しての基礎研究は不十分であり、医師の経験的な効果と理解しておいた方が良いでしょう。

臣薬は甘い草と書く甘草で、膠飴と同じく甘温であり、膠飴や桂枝を助けて陰陽の不足を補うように働きます。薬理効果としては、鎮痙作用と、慢性肝炎に対する作用や抗アレルギー作用、ステロイド様作用、抗炎症作用などがありますが、これらは主成分であるグリチルリチンによる作用でもあります。このため確率的には非常に低いのですが、臨床上、最も注意を要する偽アルドステロン症の発症が危惧されます。甘草という生薬は、保険で処方可能な日本の漢方エキス剤の7割近くに配合されている点、小建中湯をはじめ長期投与することが多い漢方薬を用いる場合、この偽アルドステロン症による低カリウム血症の結果、脱力や血圧上昇・浮腫を招くことがあります。漫然と長期処方して、ナトリウム

やカリウムのチェックを怠りますと、最悪の場合（とくに高齢者）は心不全へと進展しますので、常にこの点を念頭に置いて処方してください。

佐薬は 2 つあり、まずは桂枝です。服用した時に少しですが辛みとあま味を感じる生薬です。桂枝といえばクスノキ科の植物の若い細い枝を指し、桂皮といえば幹の皮、八つ橋などのお菓子に使われるニッケイを指します。温通散寒作用がありますが、桂皮は辛くて甘味があり、大熱で作用が強く、裏を温め腎陽の温補に優れています。これに対し、桂枝の作用は桂皮よりも穏やかであると考えられています。桂枝あるいは桂皮の薬理効果は、末梢血管拡張作用、内皮依存性血管弛緩作用、発汗解熱作用、鎮静・鎮痙作用、抗血栓作用、抗炎症・抗アレルギー作用などの薬理作用が報告されています。

もうひとつの佐薬は芍薬です。これはボタン科のシャクヤクの根から抽出される生薬です。酸味と苦みがあり、とくに酸味のある生薬は五臓の中で肝に作用するものが多く、芍薬も肝に作用します。肝の血、すなわち肝血を補い、痛みを緩和する作用が代表的な作用となります。薬理的にみますと、鎮痙作用、すなわち筋肉の緊張をとる作用があります。その他の作用として、芍薬の血管拡張作用や血液凝固に対する抑制作用も報告されており、瘀血や血虚のような「血の異常」を呈する患者に多用される当帰芍薬散などにも、芍薬が配合されている意義がここにあります。

消化管に対する作用として、芍薬抽出物のモルモット回腸に対する収縮抑制作用が報告されており、これは芍薬の *in vivo* における抗コリン作用によって説明可能です。さらに、胃酸分泌に対する作用として、芍薬のプロトンポンプインヒビターとしての作用などが報告されています。これらの薬理作用を考慮しますと、小建中湯のような芍薬製剤が、IBS などの機能性腸疾患に多用されるわけをご理解いただけたらと思います。

使薬も 2 つあります。まず生姜ですが、干した生姜のことです。味は辛く体を温め胃腸の機能を高める、すなわち脾胃気虚を温補する作用があります。生姜は六君子湯研究の飛躍的な進展により、摂食に関連するペプチドであるグレリン分泌促進に関する作用が注目されています。その他、抗消化性潰瘍作用、制吐作用や鎮痛作用なども有しています。

もうひとつの使薬は大棗ですが、これはナツメの果実です。甘くて温める作用があり、生姜とともに気血生成を促進します。薬理効果は抗ストレス作用、鎮静作用、抗消化性潰瘍作用、抗アレルギー作用などが確認されています。

以上、構成生薬の効能を解説してきましたが、簡単にまとめると、小建中湯は君薬である甘い膠飴で脾胃を再建し、酸っぱい芍薬で肝を介して、血を補い全体として陰陽の不足をうまく解消するように配合された漢方薬であると頭の中で整理していただければ十分です。

出典

小建中湯の出典ですが、『傷寒論』と『金匱要略』に記載されています。まずは『傷寒論』太陽病篇の条文を解説します。「傷寒、陽脈濇にして陰脈は弦ならば、法はまさに腹中急痛すべし。先ず小建中湯を与え、癒えざる者は小柴胡湯之を主る。」

ここで、陽脈とは患者の手に軽く触れた時に感じる脈であり、陰脈とは強く按压した時の脈の性状を意味します。前者は体表面の状態を、後者は裏、すなわち内臓の状態を反映

するといわれています。陽脈濇とは積極的というより、血液がいやいや流れている様をいい、血液を循環させるポテンシャルが低下していることを示唆します。これは気血の不足によるものであり、このため本来治癒すべき病気が表から裏に向かって進行しており、これを受けて陰脈は弦で、痛みを発する病気がまさに裏を支配しようとしていることを意味します。

従来、脾の気血不足の患者は肝の血も不足し、結果として肝の気が不安定になります。そうなりますと肝が脾まで干渉するようになり、これを肝乗脾虚といいます。この肝乗脾虚により相剋の関係にある脾がさらに悪い影響を受けて、腹痛が生じる、つまり「腹中急痛すべし」となります。この条文では傷寒にかかって少し時間がたっている時期、おそらくは少陽病期で肝の疏泄作用、つまり気の流れをスムーズにして精神状態を安定に保つ作用、これが失調しています。この場合は小建中湯を使って脾胃の機能を回復させればよいということです。もしそれで改善しなければ小柴胡湯を使いましょうという意味となります。

同じく、『傷寒論』太陽病篇に以下のような条文があります。「傷寒二三日、心中の悸して煩する者、小建中湯之を主る。」

傷寒二三日ですので、太陽病の時期に相当します。この時期に動悸やいらいらする患者には小建中湯を使いなさいという意味です。悸は心気虚つまり心のエネルギー不足により、胸骨中下部から心窩部にかけて動悸を覚える状態、煩は心血虚、つまり心を巡る血液が不足することにより現れる症状を意味します。要するに、動悸がしてわずらわしいという状態です。この条文はまさに漢方治療の根本を示してくれています。西洋医学的に考えますと、動悸がする場合、動悸を引き起こしている心臓の機能を直接改善する薬を用いるのですが、漢方では、病気の本質は心にあらず、脾胃気虚に伴う虚勞にありますので、脾胃に作用して低下した機能を改善する小建中湯を用いなさいという意味です。

次に『金匱要略』血痺虚勞篇に、「虚勞の裏急し、悸し、衄し、腹中痛み、夢に失精し、四肢痠痛し、手足煩熱し、咽乾口燥するは小建中湯之を主る。」とあります。

虚勞の虚は不足という意味合いで用いられています。長い間病気で体が弱っていることが「虚」であり、虚して回復しない場合を「損」と言います。虚と損が長引いたものが「勞」となります。虚・損・勞、この3つは病状の変遷であり、互いに関連があります。ここでは五臓のすべてが虚して不足して生じる多くの疾病の総称です。この条文では虚勞のため、陰陽両虚が生じて、様々な症状が出現していると解釈されます。「悸し」は、心気虚により動悸が出現しているという意味です。「衄し」は鼻血が出て、また陰虚、つまり体の中の水分の相対的な減少により熱を帯びている状態であり、そのため、手足がほてって煩わしく、「咽乾口燥」のような咽喉の渴きを訴えている状態です。また陽虚裏寒といい、エネルギー不足による内臓の冷えにより、腹直筋の緊張、ひきつり、痙攣などの裏急やお腹の痛みが生じます。「夢に失精」とは夢精のことで、腎の陰と陽が共に不足した状態を意味します。このような陰陽両虚により寒熱錯綜の状態、つまり熱を帯びた症状や冷えと関連する症状が入り乱れている場合には小建中湯が効果的であるという意味です。

『金匱要略』黄疸病篇では、「男子黄にして、小便自ら利すは、まさに虚勞たり、小建中湯を与うべし。」ここで使っています「黄」とは黄疸ではなく、皮膚が黄色に見えるという

意味です。これは五臓と五色の関係から脾が虚した結果現れる皮膚の色です。黄疸では小便不利、つまり乏尿となりますが、この場合は尿もまずまず出ています。このような場合は虚勞なので、小建中湯で脾胃の機能を立て直してやると良いという意味になります。また、同じく『金匱要略』婦人雜病篇では、「婦人腹中の痛むは小建中湯之を主る。」とあります。女性の腹痛は様々な原因で起こるが冷えて痛む場合は小建中湯を用いて、裏、すなわち内臓から温めて陽気を補えば痛みも和らげることができるという意味です。